令和６年度（２０２４年度）　南小国町立りんどうヶ丘小学校　学校だより
地域とともに歩む、「夢」いっぱい！の学校「自信」いっぱい！の学校

みんな輝く！　学校輝く！　ふるさと輝く！

「輝く！」 第8号

令和６年１１月２５日(月)発行　（りんどうヶ丘小ホームページＱＲコードです。給食やブログ等をご覧いただけます。）

小国公立病院のすべての皆様へ

入院して思ったこと
～病院アンケートにかえて～

　還暦を迎え、私は、人生６０年目にして人生初の入院を体験しました。
　１１月１７日、日曜日の夕方でした。その日は、昼間に波居原体育館で「米フェス」が開催されており、案内を受けた私は、岩切教育長や町校長会のなかまたちと参加しました。
　会場いっぱいに、町内の約１０件の農家の方々が手塩にかけて育てられた新米が食べられるブースなどが所狭しと並んでいて、多くのお客様で賑わっていましてた。
　すべての農家の自慢のお米を味わいたいのですが、１０件回るということはお茶碗１０杯ということですので、それはさすがに無理でした。数件のブースを回りながら、煮しめ、自家製漬物、豚汁、きのこ汁、だし巻き卵焼き、納豆、唐揚げををじめ、数え切れないほどのおかずとともに、南小国町産のおいしい新米をお腹いっぱいいただきました。
　感動と満腹感で心まで幸せいっぱいになって帰宅しました。帰宅後ゆっくりしていると、夕方から上腹部に激しい痛みが突然やってきました。今まで経験したことのないような独特の鈍い痛みでした。家族は所用で留守が続いていたので、自宅には私一人です。翌日の月曜日朝には、週初めの重要な全教職員ミーティングを行う必要があるため休むわけにはいきません。何とか翌朝までに痛みが治まることを願って安静にしていました。
　しかし、痛みが和らぐ気配は一向にありません。このままだと、夜中に我慢しきれなくなるかもしれないと思い、私は夕方６時頃学校へ行き、翌朝の全教職員ミーティングで配付予定の書類を教頭先生の机上に置いて、他の事務作業をしていました。それでも、痛みは強まるばかりでしたので、とうとう我慢できなくなり、学校に救急車を呼ぼうと一度は思いましたが、何とか残りの力を振り絞って自力で車を運転して小国公立病院に向かいました。
　時計の針は夕方７時を回っていました。事前に電話はしていたものの、入院になったらどうしようという不安の中で玄関に行きました。入り口では、警備員の方や当番看護師の方が親身になって初期対応をしてくださったので少し安心しました。
　程なくすると、当直の先生がお見えになり問診や診察をしていただきました。ドクター、看護師、検査技師の方々から、心電図、エコー、尿検査、血液検査、ＣＴなど多くの検査の結果、「急性胆のう炎の疑い」ということで即入院を勧められました。
　しかし、翌朝の重要なミーティングをしなければならない事情から、その日はいったん帰宅し入院の準備をしてミーティング終了後に出直すことにしました。そのため、とん服薬を飲んで１本の点滴注射をして帰宅しました。痛みは続いても、精神的にずいぶん楽になりました。家に帰り着いたのは、夜の１１時を過ぎていました。
　翌朝、ミーティングを終えると早速、小国公立病院へと向かい、入院生活がスタートしました。
　入院経験がまったくない私にとっては、多少なりの入院への不安と上腹部の痛みとが混じり合い、身も心も大変重苦しく感じていました。
（しばらくの間、校長の立場でありながら職場を離れることについては、頼りになる同僚たちと素晴らしい子供たちばかりですので、いささかの心配もなく安心して入院することができました。）
　するとどうでしょう。すべての不安は入院一日目から吹っ飛んでしまいました。
　すべては、病院スタッフの方々のおかげです。
　主治医の先生も、日曜日の当直医だったにもか変わらず、翌日からも毎日病室に来て、笑顔でお話をしていただきました。いつ休んでおられるのだろうと逆に心配するほどでした。
　なお、当然のことながら、病院は２４時間体制で動いているわけですから、入れ替わり立ち替わり何人ものスタッフの方々が病室を訪れ、その都度、体温・血圧・血中酸素、などの測定をされます。入院期間前半は一日に５～６回あったのではないかと思います。
　また、朝・昼・晩と一日３回湯茶や食事を運んでくださる方、そして、ゴミ箱の回収や部屋の掃除・アルコール消毒等をしてくださる方も含めてオールスタッフの方々が、親切・丁寧に、やさしくあたたかく対応してくださったので安心して療養に専念することができました。
　その際、いろんな方々が、様々な気遣いの言葉に加え、「ＹＯＵメッセージ」でなく、「Ｉメッセージ」で、「よかったあ～！」とか「うれしいです～！」などの言葉を、ずいぶん多く伝えてくださいました。
　このような、あたたかい「元気の出る言葉」に、どれだけ励まされたか計り知れません。この「元気の出る言葉」が、何よりの特効薬として、私の病状改善につながり、約一週間という予定の入院期間を２～３日短縮する結果に結び付けてくれたものと思います。
　教育現場で働く私も、「子供は、教師や親の笑顔に比例して力を伸ばす！」と確信しています。まさに、病院では、オールスタッフの方々が親や教師の立場で、患者の私が子供の立場でしたが、おかげさまで早く退院できたものと感謝しています。
　学校も含めて今やあらゆる職場が働き手不足であり、病院も例外ではないと思います。そんな中、一日中ナースコールが鳴り止むことがない慌ただしい毎日であっても、常に明るく笑顔であたたかく接してくださったすべての関係者のみな様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

令和6年11月23日　312号室患者　栃原　憲聖

＜追伸＞
　重湯や3分粥、5分粥、具無しの汁物などの病院の食事のおいしさにもびっくりでした。また。予想を遙かに超えていました。また、スタッフの方に知り合いが多くて照れくさい思いでした。

＜めざす家庭・地域像＞
笑顔と元気がいっぱいの家庭・地域！　安心して生活できる家庭・地域！　子どもの夢実現を支える家庭・地域！